


短期目標達成状況の総括

短期目標達成状況の総括

1. ツル類の安定した越冬環境づくり

短期目標に係る総合評価

 思わしくない	四万十川流域で越冬できるツル類の個体数が増えていないことから、短期目標の達成状況は思わしくない。
---	--

短期目標

これまで取組が行われてきた江ノ村地区、ツル類の飛来実績が多い森沢・間地区において、農業者の理解、協力を得て、**①冬期湛水等のねぐら環境の創出**や、**②二番穂の確保**等の採食環境の創出が行われている。



2025年の状況

①は**概ね進捗している**。
堤内地における代替ねぐら確保の取組は2021年度から現在まで継続している。
②の**進捗は思わしくない**。
取組実施箇所が限定的である。

地域住民等の理解、協力を得て、**③ツル類への人為的なストレスが低減**されている。



進捗は思わしくない。
人や自動車のツルへの接近事例が未だ散見される。
2025年度より、ツル類の見守り活動の試行について検討が開始した。

これら（①-③）の取組により、**四万十川流域で越冬できるツル類の個体数が増えている**。



進捗は思わしくない。
2021年度から四万十川流域でのツル類最大羽数、越冬数、確認日数は年ごとのばらつきが大きく、また増加傾向にはない。

短期目標の達成状況に影響した外部要因

- ・日本に飛来したツル類が鹿児島県出水市に集中し、四万十川流域のみならず四国全体の飛来数が増加していない状況にある。
- ・稲わらの腐熟促進や水田からのメタンガス排出量削減、スクミリンゴガイ越冬防止のために十分な秋耕の実施が営農指導されており、二番穂の確保が進まない状況にある。
- ・飼料価格の高騰により、二番穂が飼料として利用されており、ツル類の採食資源として残す取組が広がらない状況にある。


中期目標に向けた検討課題

- ・ツル類の生息ポテンシャルにもとづく、四万十川流域で二桁の越冬数の実現を目指した取組場所の検討
- ・中筋川の自然再生地に整備されたねぐら環境がツル類に利用されるような保安全管理の実施
- ・堤内地におけるツル類の代替ねぐら・採食環境づくりの取組の拡大
- ・ツル類見守り体制の構築と見守り活動の本格化

短期目標達成状況の総括

2. ツル類を活かした地域・人づくり

短期目標に係る総合評価

 思わしくない	理解と関心の醸成は継続的に行われてきたが、飛来・越冬するツル類の個体数が増えていないことから、ツル類を活かした農業振興・観光振興の取組は盛り上がりを欠いた。
---	--

短期目標

江ノ村地区や森沢・間地区において、農業者の理解・協力を得ながら、 ①ツル類が飛来・越冬することによる農産物の付加価値化 が進められている。	➡	2025年の状況 進捗は思わしくない。 ツル類が飛来・越冬することによる農産物の付加価値化は始まっていない。
地域住民等の理解、協力を得ながら、観光利用でのルールの設定や受け入れ体制の構築が行われ、 ②来訪者の受け入れ が始められている。	➡	進捗は思わしくない。 四万十ツル観察マナーは策定されたが、受け入れ体制の構築や来訪者の受け入れは始まっていない。
③地域内外への情報発信や普及啓発の継続 により、四万十川流域の「つるの里」としての認知度が上がっている。	➡	進捗している。 地域内外への情報発信や普及啓発は継続的に実施されている。

短期目標の達成状況に影響した外部要因

<ul style="list-style-type: none">・ ツルを呼ぶ取組を実施している水田で栽培された有機米はよく売れているため、ツルのストーリー等の付加を必要とせず、また、「しまんと農法米」もよく売れていることから、農産物の新たな付加価値化のニーズがない状況にある。・ 四万十川を資源とした観光地は点在しているものの、多くの観光客が四万十川沿いにある観光・レジャー施設を目的とし、目的地に直接訪れた後、次の観光地に向かう「通過型観光」が多い状況にある。

中期目標に向けた検討課題

<ul style="list-style-type: none">・ ツルを呼ぶ安全・安心な農作物の高付加価値化の方法、販路の開拓・維持・ 観光事業者や四万十川流域内の企業との連携・協働の一層の促進・ 四万十市での滞在型観光を活性化させるための地域資源の探索、体験・滞在メニューの開発及び、観光振興をもたらす場としての江ノ村地区の魅力向上・ 取組に参加する民間団体等への支援・フォローアップ体制の構築
--